

The Ostrakon Collection of Ishiguro Munemaro

NAKAMURA Yuta

Ishiguro Munemaro (1893-1969) built the Yase Kiln in Yase, Sakyo-ku, Kyoto in 1936, and continued to make pottery there through his later years. The Yase Pottery Kiln Research Group, launched at Kyoto Seika University with support from the university in 2018, conducted a survey of pottery shards excavated near the climbing kiln in Yase and held the exhibition, *Ishiguro Munemaro and his Yase Toyo Kiln: New Discoveries after Fifty Years* in the same year.

After he was designated an Important Intangible Cultural Property Holder for his iron-glazed ceramics in 1955, Ishiguro has been viewed as an individual, modern ceramic artist who used early Chinese and Korean ceramic techniques. However, this study of pottery shards discarded by Ishiguro himself reveals a new aspect of his pottery making which shows that he struggled to make new innovations through his experiments in Yase.

In this paper, I attempt to clarify the actual state of Ishiguro's practice as a ceramic artist by looking at a combination of things including his techniques, similar examples of his own and other ceramic works, documents and scenes from his life in Yase. This paper is related to the exhibition, *Tsubo no naka wa nandarona? /What's in the Vase*, held at the National Museum of Modern Art, Kyoto from Dec. 24, 2020 to March 7, 2021. The exhibition aims to create a collaborative art appreciation program through the cooperation of the artist, visually impaired visitors and curators; by allowing viewers to touch Ishiguro's pottery shards inside the vases, they have an opportunity to experience a new and innovative encounter with works by the artist in the museum's collection. With this in mind, I have included my notes "On the Sense of Touch," an essay in response to the experience of touching the twenty-six shards unearthed from the Yase Kiln.

石黒宗磨陶片集

中村裕太 NAKAMURA Yuta

石黒宗磨（一八九三―一九六八）は、一九三六年に京都市左京区八瀬に「八瀬陶窯」を築窯し、晩年までこの地を拠点に陶器作りを続けてきた。石黒は、1955年に鉄釉陶器の技法による重要無形文化財保持者（人間国宝）として認定されたことを機に、中国や朝鮮の古陶磁を逐った近代的な個人作家として紹介されてきた。ところが、石黒の手によってこの土地に捨て去られた陶片からは、陶器作りに苦心する新たな一面を見出すことができる。そこで八瀬陶窯から発掘された二十六个の陶片をもとに、その陶器作りの特徴、類例する自他の陶器や文献、八瀬での生活風景を組み合わせることでより複合的にその作陶を探っていききたい。

本稿は、京都国立近代美術館で開催された「エデュケーション・スタディズ 02 中村裕太 ツボノナカハナンドロナ？」展（二〇二〇年二月二十四日～二〇二一年三月七日）のWEBサイト「ABCコレクション・データベース vol.1：石黒宗磨陶片集」[<https://www.momak.go.jp/senses/abc/ishiguro/>]と連動している。本展は、作家(Artist)・視覚障害のある方(Blind)・学芸員(Curator)がそれぞれの専門性や感性を生かし、さまざまな感覚を使う鑑賞方法を創造することを目的としている。会場では、手や耳の感覚を研ぎ澄ませ、壺のなかに入ったひとつひとつの陶片に触れることで、当館所蔵の石黒宗磨《壺「晩秋」》の新たな鑑賞方法を探っていった。



図1.2 <「中村裕太 ツボノナカハナンドロナ？」の展示風景> (撮影：表恒匡)

カキ「ノ」エダブリ



襖には陶製の把手が嵌め込まれている。妻のとう（二八九八―一九八三）は、庭での畑仕事に勤しみつつ、桜、椿、梅、楓などの植栽を手入れた。この陶片には「八瀬陶窯」と染付で筆書きがされ、落葉した柿の木と主屋が描かれているのが分かる。



図3 八瀬陶窯での石黒宗磨と柿の木 射水市新湊博物館提供

石黒は、一九三六年に伊勢の呉服商の息子である長谷川忠夫（一九〇五―一九五二）の援助を得て「八瀬陶窯」を築窯する。広大な敷地には、主屋の他に、茶室、倉庫、登り窯がある。主屋は、安普請ではあるが、建築意匠に石黒の遊び心を垣間見ることが出来る。たとえば、仕事場であった土間の囲炉裏の縁には数個の陶片が埋め込まれ、

タレタ「ミミ



には、石黒の陶器が使われていた。この陶片には、壺の口の部分に手で捻って作られた犬が三匹貼り付けられている。三匹とも



図4 八瀬陶窯での石黒宗磨と愛犬 出典：『淡交』1964年2月号より

石黒は大の犬好きだった。一九三二年、民藝運動の支援者でもあった大原孫三郎（一八八〇―一九四三）からシェパードの子犬（ゲル）をもらい受けるが、すぐに亡くしてしまう。すると、大原からもう一匹（ローザ）を貰い受け、そのお礼に自作の唐津の茶碗を送っている。石黒は、その後も犬を飼い続け、鳥打ちの猟のお供にした。

耳の部分が欠け、コッカースパニエルのように垂れた耳だが、もとはシェパードのように立っていたのかもしれない。

ホトケ「ヲ」ホル



東福寺によく通っていたという。また二十代の頃には「佛山」を銘としていた。八瀬霊苑にある石黒の墓には、妻とうの墓とともに石黒が所有していた観音菩薩の石仏が移設されている。この陶片には、壺の肩のあたりに顔つきが異なる仏様が数体彫られている。石黒は、壺全面に仏様を彫っていたのかもしれない。

イモ「ヲ」ホル



石黒は、芋版技法を取り入れている。器の側面には、規則正しく茶色の上絵の具を押し付け、表面を埋め尽くしている。木版であればこのようにうまく押すことはできない。芋の柔らかさが適していたのだ。西芳寺の貫主は、石黒からサツマイモだと柔らかすぎるので、ジャガイモを使ったと聞いている。同時期にこの技法で作られた壺や茶碗の芋版は、すべて違う模様である。おそらくジャガイモの柔らかさが長い間持



図5 妻とうと愛犬と傍の観音菩薩 射水市新湊博物館提供

たなかったのだろう。この陶片には、二つの模様が見えることから、ジャガイモを包丁で二つに切って、彫ったのではないか。石黒は蛇ヶ谷時代（一九二七—一九三五）を振り返り、「蛇ヶ谷というところは、新しくできた陶器村なんです。それだけに非常に活発に皆、安物をどんどんやっていたところです。食ったり食わなかったり、ジャガイモばかり食っていたもんですね。」と『NHK映画 重要無形文化財—鉄釉陶器—石黒宗磨』（一九六〇年）（以下は『NHK映画』で語っている）。



図6 〈八瀬陶窯の全景〉
射水市新湊博物館提供

キク「ノ」ヒトエダ

石黒は「東籬下素質清純 仔細看花初学人 彫琢求工描幾帖 不知餅菊一枝真（東の垣根に咲く菊の花は清純で美しい。この花をよく見て工夫を重ねて何度も描いてみるが、花瓶に挿した一枝の真の姿には遠く及ばない）」と漢詩を読んでいる。この漢詩は、「中国の南北朝時代の田園詩人であった陶淵明の「飲酒二十首」のなかの「采菊東籬下 悠然見南山（東の垣根の下で菊を採り、悠然とした気持ちで南の山を眺める）」がもととされる。「東の垣根」ではないが、八瀬の庭一面に菊の花が咲いている古写真が残されている。この陶片には、漢詩の一部「花初学人 彫琢求工描幾」の染付の筆書きを読み取ることができる。石黒はそうした庭の情景から漢詩や陶器作りを行っていたのだろう。



親指ほどの大きさの小壺である。裏面は高台のけずりもされず、側面の釉薬は縮れている。裏に墨書きと切れ込みが入れられていることから釉薬の色見本と思



図7 〈八瀬陶窯に咲いた菊〉 射水市新湊博物館提供

コツボ「ノ」チヂレ

師をもたなかった石黒にとって、陶片は何よりも学ぶべきものだった。京都の蛇ヶ谷時代から晩年まで親交を深めていた陶磁器研究家の小山富士夫（一九〇〇—一九七五）は、一九四三年に『宋磁』を刊行する。そのなかに掲載された中国

点の陶器を作っている。この陶片は、その試作途中なのかもしれない。



スナ「ノ」アワセ

石黒は一九二九年から翌年の春まで唐津に滞在した。唐津焼には梅花皮（かいらぎ）という釉薬の縮れを見どころとした技法がある。石黒は晩年までこの技法をよく手がけている。清水卯一によると、鉄分と砂っ気の多いざらつとした土をこしらえ、茶碗の高台を削った部分に長石と木灰の釉薬を厚く掛けると縮れが生じやすくなるという。厚く掛けると縮れが激しく、薄く掛けると流れてしまう。この陶片は思いのほか縮れってしまったのだろう。砂っぽい素地が露わになっている。



ビン「ノ」カタ

師をもたなかった石黒にとって、陶片は何よりも学ぶべきものだった。京都の蛇ヶ谷時代から晩年まで親交を深めていた陶磁器研究家の小山富士夫（一九〇〇—一九七五）は、一九四三年に『宋磁』を刊行する。そのなかに掲載された中国



図9 〈粘土に砂を練り込む石黒宗磨〉 射水市新湊博物館提供

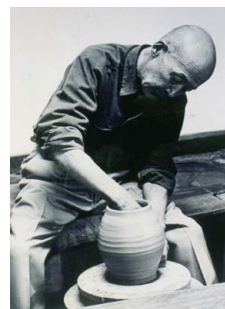


図8 〈壺をひく石黒宗磨〉 射水市新湊博物館提供



る。このような瓶のかたちは、『宋磁』にも数点見られるが、彫られた模様は類例がなく、石黒による創作と思われる。こうした青磁の陰刻は、八瀬ではあまり作られていなかったため、蛇ヶ谷時代に作った陶器なのかもしれない。

*なお本図版は、大阪市立東洋陶磁美術館が所蔵している《青磁刻花牡丹唐草文瓶（耀州窯）》である。汝窯址が河南省清涼寺で発見され、実態が明らかになるのは一九八〇年代以降であるため、小山富士夫が『宋磁』で取り上げた当時は、青白磁や耀州窯を汝窯とみる研究者が多かった。

ヤワラカイミミ



の古陶磁と石黒の陶器には類似性を見出すことができる。しかしながら、石黒はどれもそのまま模倣したわけではない。器形や描かれた図像が少しずつ異なっているのだ。哲学者の谷川徹三（一八九五―一九八九）は『石黒宗磨作陶五十選』のなかで、「中国的な固い冷たさをほのかに温かいものにしていく」と指摘している。この陶片は、瓶の肩の内側にコテが届かなかつたため、手で捻った跡が見られる。この陶片は、瓶の肩の内側にコテが届かなかつたため、手で捻った跡が見られる。



図10 《汝窯青磁牡丹唐草片彫文瓶》出典：小山富士夫『宋磁』聚楽社、1943年

ぐつと抑え込む。耳の作り方はそんなものだろうか。宋磁の水注などにもそうした作りをみる事ができる。器物の本体は轆轤によって精緻に作られているが、取っ手は柔らかい。石黒はそうした宋磁にみられる柔らかさをしっかりと捉えていたのだ。

ムクノチヂレ



石黒は、「大抵の葉は火がつくと、パチパチと燃えてめっちゃめっちゃになってしまふ。ところが、火がついてもちょうどボール紙が燃えていくようにいくらか小さくはなるが、形をそのままに灰になっていく葉があるのです。椋の木、それから榎木。この二つは、どういふ風に違っているのか。私は専門家ではないから分かりませんが」と、『NHK映画』のなかで語っている。映像のなかで石黒は、よく乾いた椋の木の葉を器に丁寧に一枚ずつ入れている。前回の調査では、登り窯のサヤの中から完成品の木の葉天目の茶碗が発見された。この茶碗がどのような経緯で残されていたのかは定かではないが、『NHK映画』で映された茶碗に器形が近い。この陶片の見込みには、焼かれて小さくなった椋の葉が残っている。指で撫でると葉の先まで起伏を感じ取ることができる。



図12 《吉州窯木葉天目茶碗》出典：小山富士夫『宋磁』聚楽社、1943年

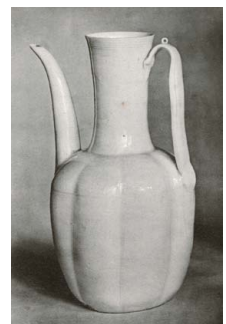


図11 《景德鎮窯青白磁木瓜形胴長水注》出典：小山富士夫『宋磁』聚楽社、1943年

カキノツヤ

石黒の支援者であった京都の外科医大屋幾久雄（一八八二―一九六二）の所有していた北宋時代の柿釉の小壺《柿釉双耳壺》は、石黒の柿釉の手本となったと言われている。石黒は自ら調合した柿釉の光沢を嫌がったという。味噌や梅干



鉢》は、柿釉の下に石黒の轆轤の跡をじっくりとみることが出来る。

ミシマノ「ホリ



線刻し、その溝に白化粧を施し、完全に乾く前にその化粧の表面を削り落としていく。この陶片とともに菱形が連続して彫られた素焼きの印花（判子）も見つかっている。陶片に合わせてみると、その大きさがおおよそ合う。《刷毛目蓋物》は、刷毛目の下をよく見ると、規則正しく彫られた三島手をみるこ

しの壺のように見えるからだろうか。弟子であった清水卯一によると、大屋はフツ化水素の薬品を持って八瀬まで行き、柿釉を失透させるのを手伝っていたという。この陶片は、柿釉の帯留めと思

われる。裏には、紐を通すためのくぼみが彫り込まれている。《柿釉火鉢》は、柿釉火鉢の跡をじっくりとみ



図13 石黒宗磨《柿釉火鉢》1937年、京都国立近代美術館所蔵

八瀬の主屋の囲炉裏の縁には、三島手の魚紋の陶片がアジの開きのように埋め込まれている。石黒は、出生地である富山県新湊を振り返り「漁師町ですね。海岸寄りの静かな町です。魚は新しいですね。みなとれたてのピチピチ生ざるのを子供の自分に食ったわけです。」と『NHK映画』で語っている。三島は、李朝期に日本にもたらされた白化粧を用いた装飾技法である。粘土が少し乾いてきた時に



図14 石黒宗磨《刷毛目蓋物》制作年不詳、京都国立近代美術館所蔵

ハケノ「ハシリ



る。この陶片は、刷毛の走りが荒々しく轆轤目に沿っていない。おそらく轆轤をゆっくり回しながら刷毛目を入れたのではないか。一方で、《鉄刷毛目茶碗》は、鉄絵によってリズムカルな市松模様を描かれている。

チョーク「ハシリ



描いたものが多い。スケッチブックにコンテで描いていくように、器に描くことのできる上絵チョークの特性に惹きつけられたのだろう。この陶片は、何を描いているのかは分からないが、チョークが走っ

石黒は京都の蛇ヶ谷時代から伊賀、三島、刷毛目を作っていたと親交のあった陶磁器研究家の小山富士夫（二九〇〇—一九七五）が『石黒宗磨作陶五十選』のなかで記している。石黒はこうした刷毛目技法を白化粧だけでなく、わらの筆を用いて、金彩や黒釉などにも応用していく。さらには、自分の指先を刷毛として、削り取った釉葉の流れを模様にしてい



図15 石黒宗磨《鉄刷毛目茶碗》1950年頃、京都国立近代美術館所蔵

石黒は目新しい技術にも食欲だった。京都市試験場は上絵の顔料にふのりを混ぜて乾燥させ、固めて棒状にした「上絵チョーク」を開発した。石黒はそのチョークで壺や大皿にバレエの踊り子やバラの花などを勢いよく描いている。清水卯一によると、石黒は一度もバレエの公演をみたことがないという。石黒のスケッチは、コンテを使って



図16 石黒宗磨《チョーク絵色釉皿》1950-59年頃、京都国立近代美術館所蔵

ているのは分かる。《チョーク絵色釉皿》は、掛け分けされた釉葉の上に橋を架けたような直線的な模様が描かれている。

サイコロノメ



石黒が作ったものか分からない。サイコロの「六」の裏は「一」で、「五」の裏が「二」、「四」の裏が「三」であるが、このサイコロは、「二」の裏が、「三」である。組み合わせがあべこべである。けれど、よくよく見ると、点の打ち方が少しずつ違う。「二」は点が大きいし、「五」や「六」は小さく押されている。しかも、何か鋭利な道具ではなく、木の枝かなにかで押されたようにも思える。石黒が何かの遊びに使ったのか、八瀬を訪れた子供がこしらえたのか。推察の域はでないが、手遊びでつくったとしても焼成まで行っているところを見ると、何かしらに使われていたのではないか。石黒の作品によくみられる連続した「点」は《鉄文壺》にも見出すことができる。轆轤を回転させながらリズミカルに筆で点々を描いている。

カキ「ヲ」ホス



石黒は、戦後に「彩瓷」という技法をはじめた。素地に白化粧を施し、高温で焼成し、その上に低温で熔ける上絵の具で模様を描いている。石黒は「陶器の化粧について」『淡交』一九五二年六月号のなかで、宋磁に見られる白化粧の二重掛けについて述べている。「乾いたら水につければよいと思ふだらうが、水に一寸つけた位では水分が生地の内部まで浸透しない、それかと言つて永くつけて置けばとろけてもと



図17 石黒宗磨《鉄文壺》1960-68年頃、京都国立近代美術館所蔵

ケシヨウ「ノ」ノリ



の土になつて仕舞ふ。そこで、水の様ではあるが水より濃度のある薄化粧にひたして、半乾きの状態にもどす。暫時すれば化粧をするに適當な潮時と同じ状態になる、之れで本化粧即ち濃い化粧をかけても裂ける心配はない。《壺「晩秋」》は、白化粧した素地の上にペルシャ黒とえび茶の上絵で干し柿が模様化されている。この陶片は本作の試作として作られたものかもしれない。白化粧した素地には、柿と言えるほどの丸みではないが、同じような筆致で上絵が施されている。



図18 石黒宗磨《壺「晩秋」》1955年頃、京都国立近代美術館所蔵

石黒は、八瀬での作陶について「十年一日 徹異端 染泥葛衣綻且寒 白片殘旬堆壘々 墻頭柿紅珊瑚々（私は十年一日の如く変らず 異端を通してきており、泥にまみれた粗末な衣服もほころび、寒さにたえられないほどだ。堀の外に廃棄した白陶の破片はうずたかく積もるばかりだが、垣の上の柿の実は真紅に熟して珊瑚のようにかがやいている。）」と漢詩を読んでいる。八瀬には、玄関近くに柿の木が植わっており、書画にはしばしば柿の実った木が描かれている。この陶片は、鉛の入った茶色の絵の具で格子文が描かれているが、化粧のノリがあまり良くないために剥離している。こうした技法は、九世紀にメソポタミアからイランに流行したペルシャ壺に見られる。石黒は当時日本で開かれたペルシャ陶器の展覧会を通じて、そうした技術を見知ったのかもしれない。

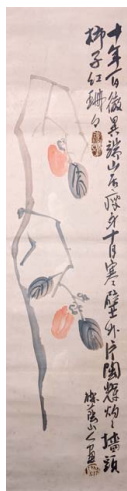


図19 石黒宗磨《柿子図》制作年不詳、個人蔵

カケタ「チャワン

小山富士夫は、一九四一年四月一〇日に中国曲陽県澗磁村にて宋代の定窯を登



見する。小山はその帰路、八瀬に石黒を訪ねている。石黒はその時にみた陶片について漢詩を残している。「片片凡神技 不知陶藝人 多時看宋覽 古瓷反猶新(どの破片もすべて神わざである。いったい、どのような陶芸家なのだろうか。長い間宋代の陶器を見てきたが、古いものほど、かえって新しさを感じさせるものだ)」。この陶片には、その書画とよく似た欠けた茶碗で描かれ、その周囲には磁州窯にみられる千点

文が彫られている。八木一夫(一九一八―一九七九)は、一九四七年頃に青年作陶家集団の仲間と連れ立って八瀬に石黒を訪ねている。「そのときの私は、石黒さんの仕事の裏うちとなっているはずの、「古典」という古色の型を感じたりはしなかった。むしろ、作家個人だけにとどまらず、現代そのものにも生きている感覚や、瀟洒な好み、造りのたしかさと柔軟性、そんなものに感心させられていたという記憶がある」と『懐中の風景』のなかで記している。八木は、古陶磁を逐った石黒の陶器作りには、石黒なりの解釈があることを見出していた。八木もまた、自らの解釈をもとに千点文の湯呑みを作っている。

トラノセ



石黒は「添竹而猶未長哮 不描牡丹反似猫 一揮落筆之何物 我書何流任衆嘲(本来なら竹を描き添え、その下で咆哮するはずだが、そうしてもまだ吼えないのだ。牡丹を描いて



図20 石黒宗磨《茶碗図》1941年、個人蔵(撮影：小杉善和)



図21 石黒宗磨《虎図》1941年、新湊博物館所蔵

クギノホリ

いないので獅子にもならず、かえって猫に似ている。筆を振るって一体何を描いたのだろう。私の画は何流だろう。まあ、人々に嘲笑に任せよう。」と漢詩を読んでいる。書画には、虎の歩く姿が俯瞰して描かれている。この陶片はその書画と同じ構図で描かれているが、虎の顔と尻尾が欠けている。それにもかかわらず、虎が悠々と背中をくねらせながら歩いている姿が見えてくる。



石黒はしばしば犬、羊、牛、魚などの動物を陶器の模様に取り入れている。この陶片は、線刻のバリの跡から勢いよく鳥を描いたことが読み取れる。清水卯一によると、石黒は先端を削って鋭くした釘で文様を彫っていたという。こうした技法は、江戸末期から明治初期に京都で作陶をした大田垣蓮月(一七九一―一八七五)の陶器を思い起こさせる。尼僧であった蓮月は焼き物に自作の和歌を釘で彫った「蓮月焼」を作り、京都の土産品として人気を博した。生前から贗作も多く出回り、その制作で食べていけない人に自らの和歌を提供したという逸話も残されている。石黒は蓮月の和歌をもとに「手すさひの つたなきものもちいでてうるまのいちにたつそわひしき」と読んでいる。蓮月のもとの句は「手すさびにはかなきものを持ち出でて うるまの市に立ぞわびしき」である。石黒は自らの生業を蓮月と重ねていたのではないだろうか。



図22 石黒宗磨《蓮月尼像》1963-64、個人蔵(撮影：宮川邦雄)

執筆にあたり、主に小山富士夫の編纂による『石黒宗磨作陶五十選』、清水卯一の作品解説による『人間国宝石黒宗磨 陶芸のエスプリ』、小野公久の『評伝石黒宗磨異端に徹す』を参考にさせていただきました。